

暁に住まう精靈遣い

カエサル

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

第四真祖が治める四番目の夜の帝国——“暁の帝国”

彩海学園高等部に通う綾瀬練斗はごく普通の人間らしい生活を送る精霊者だ。まあ、  
周りは全く普通ではない。同級生には吸血鬼、後輩にも吸血鬼、街を歩けば吸血鬼と  
いつた吸血鬼どんなけいんだよつて生活を送っている。

これは『無気力系精霊者』と『吸血鬼』たちが織りなす物語だ。

この作品は、『ストライク・ザ・ブラッド』神なる名を持つ吸血鬼』から二十年後  
のお話です。

不定期更新ですのでお暇だつたら見てください。

0  
2.  
.

無氣力系  
静寂の侵攻

目

次

18 1

# 01. 無気力系

目を覚ますと部屋はまるで蒸し風呂のようになつていて。眠気のせいなのか部屋の中で陽炎現象が発生しているように見えてしまう。

いや、これ部屋の中で陽炎起きてないですかね。そう思わせるほどにここは暑かつた。

「あ……ちい……」

ようやくこの部屋の主である綾瀬練斗が口にできたのはそんな言葉だつた。

調子が悪くなつて二週間、そろそろ壊れるとは思つてはいたがとうとう昨夜エアコンがお亡くなりになられた。そんなわけでこの部屋は蒸し風呂のようになつているというわけだ。

壁掛け時計を確認するために顔をわざかに起こす。

短針が六、長針が十二の文字盤を指したところだつた。

「はあ……」

学校に登校していなければ行けない時刻は八時四十五分までだ。約三時間後くらい

後のことだ。いつもであれば八時くらいに起床して八時半に家を出ればギリギリで間に合う。

しかしこんな蒸し風呂の中で二度寝などできるわけもなく渋々ながら練斗は布団から起き上がる。

寝起きのおぼつかない足取りで窓際まで歩いていき、カーテンを無造作に開け放つた。

「うつ……」

あまりの陽光の強さに呻く。

「これだからこの島は嫌なんだよ」

誰に言うでもなく愚痴をこぼす。

太陽というのは等しくどこにでも熱気と光を振りまく。しかしそれがこの島では異常なまでに強い。

東京の南方の海上三三〇キロメートル付近に浮かぶ人工島。『魔族特区』とも呼ばれ、魔族、吸血鬼、魔女、人工生命体、そして人間が共存する島だ。かつては『絃神島』という名で呼ばれていたらしいが練斗がここに来た時にはその名で呼ぶものはないなくなっていた。

世界で四つ目、『第四真祖』暁古城が治める夜の帝国——名を『ライヒ・デア・モルゲンロート

ドミニオン

』——

と呼ぶ。今では日本の四国同等まで領土を広げており、今でもその領土を広げ続いている。

そんな少し異常な島であつても人々はなんら変わりなく噂というものを語る。二十年前に起きた大災害。それは世界の各地に甚大な被害を与えた。それは例外なく旧絃神島にも降り注いだ。ほぼ壊滅寸前にまで追いやられることになつた絃神島であつたがそれを四つ目の夜の帝國ドミニオンになるまでに成長させたのは第四真祖だと言われてはいるが、もう一人影で動いていた吸血鬼がいたという噂だ。

真祖に並び立ち、真祖ならざる異端なる存在。神々の名を持つ眷獸を従える伝説の吸血鬼——“オリスプラッド神意の暁”。

それは噂だ。本当にいるのかどうかもわからない。

それについてもいなくとも練斗には大して問題なことではない。

「はあー……制服だけでも着とくか」

無駄に眩しい日差しを背に受けながら学校へと行く準備をするのだった。

眠い。朝早く熱気によつて起こされた睡眠不足の体では仕方がないことであろう。非常に都合のいいことに教室にはクーラーが効いており、確かにちょうどいいとまで

は言えないが家にいるよりは確実に安眠を取ることができる。

「珍しく朝早く来てると思つたらなんで寝てるのよ、あんたは」

机に突つ伏している顔をわずかに起こすと前の席に誰かが座っているようだ。

練斗はめんどくさげに再び机に突つ伏して、ごもつた声で反応する。

「うちのエアコンがぶつ壊れて寝れなかつたんだよ。だから俺に構うな、萌葱」

「せつかくあたしが話してあげてるんだから顔ぐらい上げて言え！」

無理やり体を起こされた練斗は椅子の背もたれに全体重を預け、眠たい異様に細い目で彼女を睨みつける。

端整な顔立ちに、華やかな髪型。まぎれもない美人ではあるが色気というものは感じられない。いつものように彩海学園高等部の制服の上に白衣を着ている。

「改めておはよう、練斗」

皮肉っぽい微笑を浮かべる萌葱に、

「おはよう、吸血鬼殿」

最高の皮肉を込めた言葉で挨拶をしてあげた。

彼女は少しムツとした表情を見せるが別に何かしてくるということはなかつた。

クラスメイトに吸血鬼がいるというのは特別この島では珍しいことでもなんでもない。むしろ誰がどんな種なのか全員把握しているのものなどいないであろう。それだ

けこの島では魔族が認められているのだった。

しかし中には自分の種を嫌う者たちもいる。萌葱は別に自分が吸血鬼であることを嫌っているというわけではないが言わることはあまり好いてはいないようだ。

「まあまあ、そう怒らずに」

机の上に置いてあつたメガネを掛けながら機嫌斜めになつた萌葱を落ち着かせる。「あーあ、残念だなー……せつかくエアコン直しに行つてあげようと思ったのになー。本当に残念だわ」

「すみませんでした！　直していただけるのであればお願ひします！」

速攻で謝り、両手を顔の前で合わせる。

萌葱は異様なまでに機械系に強い。それはシステム的などから始まり、外部の配線などもできるスーパー女子高生なのだ。彼女に頼めばだいたいの機械不良は直つてしまふのでクラスメイトたちも頼むことが多い。

「まあ、いいわ。今回はファミレスで勘弁してあげるから」

練斗は頭を抱える。普通の女子なら飯をおごるくらいどつてことはないが彼女の胃袋は底知らずといわんばかりに大食いだ。

「……ファーストフードで勘弁してください」

「仕方ないからそれでいいわよ。どうせまた金欠なんですよ」

「……その通りです」

家賃もかなり安く彩海学園に近い、そしてテレビや洗濯機、エアコンといった日常に必要なものが揃っているという理由で決めたボロアパートに練斗は住んでいる。このアパートは『ライビ・デア・モルゲンロート』暁の帝國がまだ『絃神島』と呼ばれていた時代から建っている。大災害の中でも耐え抜いたという点ではかなり丈夫な建物なのだろうが、最近になつていろいろな家電製品がおかしくなつてきてとうとうエアコンが壊れたということだ。

「でも、今日は学校帰りに零菜と買い物に行く予定だからさ」

「零菜つてあの中等部の巨乳ちゃんか」

萌葱は少しの間を空けてから呆れたという口調で、

「あんたそんなことばつか言つてると古城君に……まあいいわ」

めんどくさくなつてか途中で言葉を切る。

「買ひ物が終わつて時間があるようならあんたの家に直接向かうわ」

「わかつた。けど夜になるなら連絡しろよな。迎えに行くからよ」

「あんたつてそういうところはちゃんとしてるわよね」

いやらしい笑みを浮かべながらこちらを見ている萌葱の頬はわずかだつたが紅潮しているように見えた。

「そういうところもな」

助詞をかなり強調する。

頬杖をつきながら窓の外を見る。校門から続々と同じ服装の生徒たちが登校していく。いや、高等部と中等部ではわずかだが制服の色に違いがあった。とはいっても遠目からではそれほど違いがないのでどちらかなど区別がつかないのがな。「そういえば前から気になつてたんだけどさ」

窓の外を見ていた顔を萌葱の方へと向け直す。

「あんたつて眼、悪かつたつけ?」

眼鏡を指差しながら彼女は不思議そうに尋ねる。

「あ、ああ……てか、なんでそんなこと気にすんだよ」

「いや、眼鏡ない方がかつこいいからさ」

「え! マジで! ?」

思わず椅子から立ち上がつてしまつた。

「いや、練斗つて普通にかつこいい方の部類だとと思うよ」

萌葱の言葉に自分が今までしてきたことの無意味さを感じる。正直な話して眼鏡を掛けているのはあまり目立ちたくないし、眼をつけられたくないからなのだが性格はともかく容姿端麗な萌葱にそんな風に思われているということは素直に嬉しい。「まあ、でも性格がねー」

前言撤回。

「お前に性格をとやかくは言われたくねえっつうの」

「それはお互い様よ」

萌葱はいやらしい笑みを浮かべた。

本日も睡眠学習という素晴らしい学習方法で一日を終えることができた。途中で担任教師に呼ばれるというアクシデントが起きたがそれは過ぎたことだし良しとしよう。

そして今日の放課後には練斗に対してイベントが待ち構えていた。

急ぎ足で教室から飛び出して真っ先に向かった先は学校から最寄りのスーパーだった。

今日はスーパーで肉の特売日。貧乏学生である練斗にとつてはなんとしてでも手に入れたい代物なのだ。“暁の帝國”<sup>ライヒ・デア・モルゲンロート</sup>は孤島ということで他の国から輸入するはどうしても物価が高くなってしまう。そのせいで普段肉などは高級品でしかないのだ。だが、練斗が戦わなければいけない相手はこの激戦を幾度となくくぐり抜けてきたいわば歴戦の勇者。食事のためならその身さえもいとわないおばちゃんと戦わなければいけない。

スーパーの前で一呼吸置いてから自動ドアの前に立つ。ガラスの扉は左右に割れる。するとこちらを歓迎するような音楽が耳に届く。

しかしながらスーパー内部はまるで殺氣立つたように重い空気が漂っている。どうやら全員臨戦態勢のようだ。肌をピリピリ刺すようなこの感じ嫌いではない。

店内の外周を周りながら生鮮食品売り場へと足を運んでいく。徐々に近づくにつれて気配は一層強くなつていくのがわかる。

生鮮食品コーナーにたどり着くと一角だけ空いているスペースを見つける。どうやらそこに練斗の御目当ての商品が現れるようだ。

肉を狙える絶好のスポットでその時が来るのを待つ。何もせずにただただ精神を落ち着かせるように、じつと待つ。

そしてその時は唐突に訪れた。

エプロン姿の店員が銀色の台車を持つて現れる。そして一角だけ空いているスペースに立つと拡声器を口に当てる。

「ただいまより、和牛の半額セールを開始いたします」

その声が始まりように獲物を狩る狼たちは一斉に前へと躍り出た。

練斗も床を強く踏み込んで前へと出る。

紅く染まつた海道を練斗は鼻歌混じりのスキップで帰路へとついていた。クラスメイトに見られたら気持ち悪がられること間違いないがそうせずにはいられないほどにテンションが上がっているにだから仕方ない。

練斗の右手には小さめのビニール袋が下げられていた。あの激戦を勝ち抜いて肉を手に入れることに成功したのだから。

上機嫌のまま家にもうすぐつくところということだった。  
「ん？　あいつ何やつてんだ？」

練斗が住むボロアパートの前に彩海学園の制服の上に白衣を着た少女と中等部の制服を着た黒髪の少女がいるのが見える。

「おーい、萌、ぎ？」

声を掛けようとしたが二人の他に誰かがいる。髪を金髪に染めたホスト風の男とアロハシャツを着た頭の悪そうな男。

明らかに知り合いという感じではなくあの男たちが一人をナンパしているように見える。

「あー、と深いため息をついた。

「おい、その子たち嫌がつてんだろ」

そんなクサイ台詞を言いながら練斗は萌葱たちに近づいていく。

「あー？　　なんだテメエは？」

ホスト風の男が明らかに敵意をむき出した感じではこちらを睨んでくる。

「まあ、一人とはクラスメイトでもう一人は後輩つてところの関係かな」  
めんどくさげに説明する練斗に頭の悪そうな男が、

「なら突つかかってくるなよな。俺たちはデートのお誘いをしてんだからよ」「デートね……」

萌葱と中等部の巨乳ちゃんをナンパするなんてこいつらどんだけ自信家なんだよと言いたくなってくる。

「あんたたちのお誘いは断つたでしょ。あたしと零菜は今からこいつの家に行くんだから」

萌葱は零菜と呼ばれた少女の手を掴むと練斗の体をまるで盾にするように後ろに隠れる。

「こんな冴えないやつより俺らと遊ぼうぜ」

決まり文句のようにホスト風の男が言う。

練斗は再びため息をついてめんどくさげにボロアパートを指差す。

「とりあえずそこ退いてくれねえかな。家に入るのに邪魔なんで」

「んだと、テメエ!?」

するとホスト風の男はしごれを切らしてか突然こちらに殴りかかってくる。

「まじかよ——ツ！」

反射的に練斗はホスト風の男の拳を回避すると右手を固めてカウンターを決めてしまった。

「あつ……」

顔面にクリティカルヒットしたホスト風の男は綺麗な軌道を描いて吹き飛ばされていった。

「て、テメエ!?

「す、すみません。つい手が出てしまって。それにこれって正当防衛ですよね」

申し訳なさげにしていると吹き飛ばされた男が起き上がる。

「許さねえからな、クソガキ——ツ！」

その叫びに呼応するように魔力の波動が空气中に撒き散らされる。男の瞳は真紅に染まり、左腕から鮮血溢れ出していく。

「吸血鬼!?

後ろにいた萌葱が驚愕の声を上げる。

魔力の塊は徐々にその姿を形成していく。紅蓮の蠶、緋色に輝いた体毛の獅子。

「——來い、炎帝!!<sup>エンティ</sup>」

姿を現した眷獸は撒き散らされた魔力を周囲を焼き尽くすほどの灼熱へと変える。

「——D種か」

「D種か、じゃないわよ。どうすんのよ、練斗！」

「知らねえよ。お前吸血鬼なんだからどうにかできねえのかよ」

あぐび混じりの口調で言い放つ練斗の前に小柄の人影がスカートを揺らしながら舞い降りた。

「二人とも下がつて！」

リニユーチアルされた彩海学園中等部の制服に着た黒髪の綺麗な顔立ちの巨乳の少女、零菜が練斗と萌葱を守るように前に出る。

「女相手だからって手加減しねえぞ。焼き払え、炎帝！」

凄まじい雄叫びと共に獅子が生み出した爆炎がこちらへと向けて襲いかかってくる。周囲に植えられている木が熱気によつて燃え始める。この島の建物はほとんどが魔力対策が施されているため、壊れたりすることはあまりない。しかし爆炎の獅子の炎は周囲の焼き払う勢いだ。ただ脅すというようなものとはわけが違う。本気で相手を潰しにかかっている。

練斗はとっさに零菜の前へと出ると爆炎に向けて左手を前へと突き出した。

「危ない！」

零菜の叫ぶ声が聞こえる。しかしそれでもここから退く気などさらさらない。

「……力を貸しやがれ、サラマンダー火炎龍」

小さく呟いた。そして爆炎が練斗の体目掛けて直撃した。

「へ、ざまあねえ……なつ！」

男の言葉の語尾が驚愕に変わる。それもそのはずだろう。先ほど爆炎に飲み込まれたはずの練斗がそこに立っているのだから。しかも傷一つ負うことなくだ。

「炎の帝つて言うからにもつと強いもんだと思つてたんだが大したことねえな」

驚いているのは後ろの少女二人も同じようだ。しかし今練斗がやるべきことはただ一つだ。友人と後輩を傷つけようとしたこいつらを潰すことだ。

「悪い、ちょとこれは持つてくれ」

「は、はい」

零菜に右手に持っていたビニール袋を渡す。

「お前たちさ、学生ナンパして挙げ句の果てに一般人に向けて眷獸使つたつうことはこつちも本氣でいいんだよな」

練斗は眼鏡を外し、カツターシャツの胸ポケットへとしまう。それを合図に周りの空気が徐々にユラユラと揺れだした。それは練斗の体内から溢れ出る魔力だ。吸血鬼の

眷獸に比べたら取るに足らない微量なものだ。しかしその気配を感じ取つたのか男たちがわずかに後退する。

「な、何が本氣だよ！　あいつを喰い殺せ、炎帝！」

爆炎の獅子が雄叫びを上げ、襲いかかってくる。しかしそれでも練斗は全く動じない。むしろわずかに笑みすら浮かべる。

わずかに腰を落として左手を前に、拳を固めた右手を後ろに後ろに引き絞り、腰に捻りを加える。それは武術の構えだ。

「失せな……眷獸」

練斗を喰らおうと襲つてくる獅子へと向けて後方へと引き絞つていた右手を腰の回転を加えて一気に解き放つ。激突すると共に途轍もない衝撃波が辺りを包んだ。

魔力の塊である眷獸相手に素手で挑むなど死ににいくようなものだ。誰もが勝てるわけがないと思っている。しかし当の本人の練斗だけはそんなことは思つてもいい。

しかし結果は誰もが予想すらしていなの方に転がる。

土煙舞う中、姿を現したのは爆炎の獅子ではなくただの人間というレツテルの貼られているはずの練斗だつた。

「これでわかつただろ。テメエの眷獸は俺には通用しねえつてことだ」「お前、一体何者だ？」

練斗はめんどくさげに頭を搔きながら、

「教えるわけねえだろうが……バーカ」

そして再び周囲の空気を揺らめかせる。

すると男たちは一瞬の間に後に情けない声を出して逃げ去っていく。

ふうー、と小さくため息をついた。

「ふうー、じやないわよ！」

後ろでずつと見ていた萌葱が久しぶりに口を開く。

「あんたって普通の人間なんですよ？」

なんであんなことできるのよ！

ちや

んと説明しなさいよね！」

「別に気にすることでもねえだろ。魔族の友人なんて腐るほどいんだろ。俺もその一人つてことで処理しといてくれ」

「ダメです！」

意外なことに今度は零菜が突つかかってきた。

「聞いたことないですよ。眷獸を素手で倒す力なんて。

それに仮にそんなことが出来たとしても一撃で倒すなんておかしいです！」

なんで喋つたことのない女の子にここまで攻められているんだろう。

てか、顔近いな。よく見て見なくても可愛いことはわかつてはいたが近くで見るとな

おさらヤバい。こんな子に迫られるならいいかな。

「そういう力もあるってことで納得してくれないですかね？」

一応は説得してはみるが結果は、

「納得いかないわよ（です）！」

練斗は苦笑いを浮かべながら弱々しく呟いた。

「……勘弁してくれよな」

## 02. 静寂の侵攻

まさか美少女二人がこんなボロアパートに訪れる日が来るなんて思いもしなかった。本来であるならばテンション上がりっぱなしなのだが今の練斗にはそんなことを思えるような余裕はない。

先ほど眷獸を一撃で葬り去ったしまつた能力について説明しようと零菜と萌葱に責められまくっているというのが現在の状況だ。

「だから、そういう能力ってことで片付けてくれって言つてんだろ」

何度このセリフを言つてるんだというくらいに同じことを言つていたい加減めんどくさくなってきた。

「それじゃ納得いかないって何度も言つてるでしようが！」

強い口調で萌葱が言うが口を割る気はさらさらない。

「だいたいさ。俺の能力を知つたところでお前達に徳があるわけでもねえしよ」

畳まれた布団の上にあぐらをかきながら膝の上に肘を立てて面倒くさそうに呟く。

「ありますよ。綾瀬先輩の能力がもしかしたらこの島に危険が及ぶかもしません。な

のでわたしは古城君に知らせる必要があります

会つてから数十分の女子中学生にいきなり島の害悪扱いされてる練斗つて何なんだ。  
まあ、後輩に先輩を敬えなんていうようなたちでもないから別にいいのだが。

「ていうか、第四真祖閣下を“君”呼びは如何だと思いますけど」

「わたしは別にいいんだよ」

自信満々にいう零菜にとても肝が座つている少女だなという感想を持つ。それもそ  
うだな。ほとんど話したこともない相手にここまでずかずかいけるんだからそうなん  
だろうな。

「どつちみち今日は遅いから帰れよな。途中まで送つてくれからさ」

とりあえず早くこの二人には帰つてほしい。そして貴重なタンパク質を早く体内に  
取り込みたい。

「そうね。今日は遅いしまた明日問い合わせることにするわ」

「問い合わせても教えねえからな」

重い腰をやつとあげた萌葱に合わせて零菜もようやく帰る気になつたようだ。

練斗も家の鍵とスマホだけを持って立ち上がり、玄関へと向かっていく。扉を開けた  
時には、外はもう紅色から闇色へと変化していた。

不思議なことに夜だということを認知しただけで眠くなつてしまふ。大きな欠

伸をしながら二人が家から出てくるのを待つ。

何か家中を物色してゐんぢやないかと戻ろうとしたと同時に玄関が開いた。

「おまえら遅えよ」

「女の子には色々と準備があるのよ」

萌葱が玄関の壁を支えにローファーを履いている。座つて履いてくれたらワンチャン下着をお目見えすることができたかも知れないのにとつても残念です。

「つて、人の家で何を準備すんことがあんだよ」

「それはあれよ、練斗がどこにエロ本隠してるかの捜索よ」

「隠してねえし！」

「そもそも持つてねえよ！」

いや、本当は持つている。だが、あの場所ならバレるわけがない。

「あんな布団の下なんていうバレバレの位置に置いたあつてよく言うわね」

「そんな場所あるわけねえだろ。キツチンだよ……あ……つ」

つい口が滑ってしまった。

「今度来た時はそこを念入りに探させてもらうわ」

萌葱がいやらしい笑みを浮かべる。零菜はなぜか深いため息をついて自分の腰に手を当てている。

「綾瀬先輩つて萌葱ちゃんから訊いてた通りの人なんですね」

「萌葱に訊いてた通り?」

はい、と零菜が大きく頷く。

どんなこと言つたんだよ的な目で萌葱を睨みつけているとすぐに零菜の口から答えが出てくる。

「えーっとねー……まず、いやらしくて……」

「待て待て待て！」

彼女の言葉を遮る。

「別にいやらしくねえし、そもそも最初からそれってどういうことだよ！」

「だつてあんたつて何かあるとあたしをいやらしい目つきで見てるじやんか」

自分の胸を両手で隠し、警戒心MAXのような体勢をとる萌葱。

「お前の未熟な胸なんかに興味なんてないわ！ それなら中等部の巨乳ちゃんの胸をガン見する……わ……」

またしても口を滑らせてしまった。

女子二人からの視線が軽蔑するようでとても痛い。

やめて、お願いだからそんな虫を見るような目で見ないでください。心が心が痛いか

ら。

「変態ね」

「いやらしい」

その言葉で完全にノックアウトまで持つていかれた。

「い、いや……そ、その……これは、本心ではなく、つて……」

「そんなきよどつたみたいに言われても説得力ないわよ。まあ、今のあんたほど説得力のないものはないけどね。ほら、こんな変態ほつといて早く帰りましょう」

せつせと先に歩いていく萌葱。

「あつ、待つてよ、萌葱ちゃん。綾瀬先輩さようなら」

こちらに深く一礼した零菜は急ぎ足で先に行つた萌葱の元まで駆けていく。  
練斗は大きなため息をついてから少し早足で二人に追いかける。

「なんでもついてくるのよ」

「だから、送つてくつて言つただろうが。また変な連中に絡まれたらたまつたもんじやねえからな」

萌葱は長めのため息を吐いた。

「あんたつてほんと変なところ律儀よね」

「別にいいだろうが」

今練斗の好感度などほぼゼロに近いのだから少しでもここで好感度を上げておかなければあとあと何言われるかわからない。それにどんな有る事無い事の噂をばら撒か

れるかもわからないからな。

「まあ、さつきのことは昼飯一回奢りで許してあげるわよ」

練斗は顔を引きつらせる。今度はファミレスやファーストフードではなく昼飯という不確定要素が強すぎる単語に変わってしまった。だが、今否定すると後々大変な目にしか合わない。

「は、はい……わかり、ました」

肩をあからさまに落としながら練斗はトボトボと萌葱宅へと向かっていく。

「もちろん零菜の分もだからね」

……ですよね。

わかっていたことだけれど言われない限り大丈夫だと思つていたのに。

暗黙の了解?

そんなもの知らないし、知りたくもないわ。

だが、言われてしまつた以上断れない。

「は、はい……わかり、ました」

機械が如く同じ言葉で返答する。

「どうする、零菜?  
中華とか和食にする?」

「わたしはイタリアンとかもいいかな」

女子二人が遠慮ない言葉で怖いことを言つてゐる。

——今月、生活できるかな。

そんなことを考えながら練斗は暗い空を仰いだ。

次の日のことだつた。昼時の学食は腹を空かせた学生たちで賑わつていた。

いつもであれば、行きのコンビニで売つているパンやおにぎりなどを買つてきて晴れの日なら日当たりの少ない校庭の隅に堂々と立つてゐる大木の陰で食べるのが日課なのが今日はそうはいかなかつた。

四時限目の授業を必死に眠気から耐えてやつと昼食だ、といつもの場所に向かおうとした練斗を萌葱が止めたのだ。

そんなこと無視して向かおうとしたところ意外な人物に廊下を封鎖された。

「綾瀬先輩、昼食一緒に食べませんか？」　昨日のこととも聞きたいですし」

可愛らしい声にテンションが上がつたのはほんの一瞬だつた。その声に聞き覚えがとてもあつた。普通に話しかけられたならとつても嬉しいが、今日は全く嬉しくなかつた。

昨日のことを問い合わせにわざわざ高等部まで現れた零菜だ。

すぐに逃げようと振り返つてみたものの時すでに遅く。後方は萌葱によつてふさがれていた。

退路を完全に立たれた練斗に残された道は強制連行しか残つていなかつた。

昼時の学食は混んでいるから普段は絶対に使わないものだ。なぜわざわざ人が多い場所に向かわなければならないのだろう。それに一人暮らしの貧乏学生にしてみれば学食の値段も決して安いわけではない。コンビニのおにぎりなどで済ませてしまつた方が確実に安上がりになる。

加えて面倒というようがないのが、零菜、そして萌葱の見た目である。容姿端麗な二人と一緒に練斗みたいな地味系男子が話しているだけでも他の男子からは「なんだあいつ」的な視線で見られる。

——いや、別に地味系とかじやなくて目立たたくないだけだし、俺はわざとだしい。

それだとしてもそんな視線をずっと浴び続けるのは、あまり心地の良いものではな

い。  
「それで、本題に入るけど……」

そう切り出したのは萌葱だつた。学食の奥の席。日がほとんど当たらずエアコンが程よく当たる絶好のポジションの席に練斗と萌葱、零菜は座つていた。

「あんたつて結局何者なの?」

「ずいぶんアバウトな質問になつたな。

練斗は一旦、水で喉を潤してから迷わず答える。

「人間」

すると二人からは、同時にため息が漏れた。

このままじや、昨日と同じ展開になると理解したのだろう。

「あんたのこと昨日母さんに調べてもらつたけど特に変なことも出なかつたのよね」

なんかサラッと個人情報を調べられたって言われた気がするんだけど。

ちなみに萌葱の母親は『ライヒ・デア・モルゲンロート』の帝国最高技術顧問という大層な肩書きを持つている。いわゆるお偉いさんの娘がこの目の前にいる肌な少女なのだ。

「あの、綾瀬先輩」

「ん、なんだよ零菜？」

零菜が先ほどとは違う少し真剣な表情でこちらを見ている。  
「どうしてそこまで頑なに能力のことを隠すんですか?」

練斗はわずかに俯いた。

確かにそうだ。『ライヒ・デア・モルゲンロート』では、昔のように魔族や吸血鬼が特殊な扱いを受

けているということはなくなつた。だが、魔族や吸血鬼であれば、この彩海学園では特別教育カリキュラムとして戦闘訓練をやらなければいけなくなつていて。しかし、それは強制というわけではない。さらに言うならば魔族でもなんでもない人間が受けることだつてできる。

だから言えば、正直能力のことを隠す必要はほぼと言つていいほどない。

「いや……」

言葉に詰まる。別に頑なに隠さなければいけない理由というわけではないのかかもしれない。しかし、練斗あの時の記憶を思い出したくもない。

決して練斗が能力を手に入れたのは、祈りでも望みでもなく、ただの……。

「大丈夫、練斗？」顔色かなり悪いわよ

「あ、ああ……大丈夫だ」

思い出したくもないものを思い出して吐き気がこみ上げるのを必死で押さえ込む。

「す、すみません……わたしのせいです」

零菜が申し訳なさそうに頭を下げる。

「いや、キミのせいじゃないから」

結局、その後二人が練斗の能力について聞いてくることはなく。ただのたわいもない話をしながらの昼食となつた。その間も男子たちの刺さるような視線を浴び続けた。

闇が支配する世界へと変化をした “暁の帝國” の港は異様なまでに静まり返っていた。

人もおらず、風も吹いていない。

そんな港に一人の人物が佇む。全身を覆うほどの大きなローブ。死神が纏っているようすに端はボロボロに切れている。

ローブは中央にそびえ立つ逆ピラミッド型の建物を睨みつける。

「……認めるか、第四番目の夜の帝国など」

わずかに風が吹き、顔を覆っていた布がわずかに揺れる。その口元は、生々しい赤い液体が垂れている。そしてその端から異様なまでに尖った犬歯がのぞいている。

“暁の帝國” に訪れた脅威に未だ誰も気づくことができないのだつた。